



西遊全傳

二編

三



2500  
40-13





門遠  
2500  
40-13

池清



繪本西遊記二編卷之三

池清

心猿正處緒緣伏

劈破傍門見月明

却說孫行者八雲頭を按落老君の力を備ふ師又小結つて王わんんの三  
 藏是を感歎かんたん夫おたり師徒進しん一行いっ行ぎょう數日すうじつ一日いつにち天色將あま小晚よるん  
 坐ざ乃寺院いんかり三藏馬を下くだり進しん山門さんもん小至いたり又また小額がく小五個ごこ乃大  
 字を鑄そて勅賜てうみ空林寺くうりんじとあり三藏顧くわん曰いは徒弟とだいに們ら茲いま小待まち我われ院いん内  
 小ちひひりり宿やどを借かんと進しん山門さんもん小令しん又また小兩りゆう辺へん小一いつ對たい乃なり金剛神こんごうしんを坐  
 二層門にじようもん小到いたり又また小四天王しつてんわう乃像やうを排は列りやくと大雄だいゆう堂どう殿でん小ちりり三  
 藏合掌さんざうがっしやうと是を拜をらい佛ぶつ臺だいを廻めぐり後のち面めん小到いたり又また小觀音くわんおんの  
 像やうあり三藏又是を拜をらいと並ならぶ小旁はた門もん乃裡うちより一個ひとつ乃道人だうじん出いききり



ぬ三藏則ち道人の向ひ貧道は是東土唐の使西天ふり佛を拜  
 し經を未んて今宝刹ふりて天晚小及りねがむ二宿を許し  
 む道人曰我僧官にあそ。裡小老師あり。今斯と告し師又此  
 所ふ待ふと今僧官小報しれを老師をわら門を用て迎へ  
 しが三藏を及り大い不與道人を罵り曰汝ふらむや我は僧官  
 なり只士夫降香ある向を我出迎て接む。這亦の遊和尚の二晚と  
 是非なく宿を乞む前廊の下ふ外しむるも是まきり何ぞしり  
 し我小報しやと身を縛り内へ入ぬ。三藏是成はる双眼赤  
 を流し長歎。我前世幾千の悪業をなせしや今生常は不良  
 人小遇しと身を悔む愁然と。飯をいづる行者師又満眼愁  
 容し。然るを問曰寺内は和尚何れを罵しひ。三藏曰此寺

不使かり別里小行し宿を未む。行者曰豈此理の。我進  
 今宿を未んて鉄棒をとりて暹小殿上より入る道人佛を削り  
 挿香し居し。行者厲声し一声呼しれを道人誑し。跌倒大に戦  
 慄し滾々方丈へ蒐入老師小向ひ外面小又入り和尚きり。僧  
 官曰這數子再び未り何をうのや。道人曰這個は和尚那の僧と  
 一般し。手満面毛し。環眼さあがり雷公の。手小長た鉄棒を把  
 り狼々の小人を赤し。勢あり。僧官是を少し。門を閉ぢんす小  
 早行者進み。其面鏡小醜陋和尚慌し。方丈の門を鎖し。行者  
 者早し一脚を上り堅門を踏破し呼曰早く一干間を去掃。老孫  
 小借と。僧官房裡小躲し窓より脚し曰這荒山方便。手  
 別所小行し宿を未む。行者曰汝未方便あり。手道具を搬出



三藏師徒到寶林寺





去僧官が白我手中の僧四五百人那の裡へ到りて被窩のふ  
 ても置処有すか行者が白汝を出せんと一個出され此鉄棒を  
 下見て金一和尚朝日と我決し不出汝を呼ばれ試し見行  
 者大の小腹を三羅等試しと刀を切しと頭を叩くも側小  
 大なる石獅子あり頓まり寄棍を上と兵々一下を忽ち粉砕し  
 たる僧官是を忍び膽を消し骨軟筋麻と声を上大徳手を  
 止りて宿を借すのせし行者が白先小我師きと宿を求る小汝  
 罵り借せ今吾手限を忍び借せし何ぞう薄情なる今汝を  
 那石獅子ろくろくをせぬも吾師又西天小赴死經をとるの縁  
 路の大慈悲心成りて汝をせむ汝を始寺内僧徒残守長衣  
 を多く慰懃小我師又を迎きしれどもかた一人も残り獅子の如

く粉砕小をこし威しられ和尚大の慈悲心成りて那道人小を分  
 付多小道人行者が猛威小恐はらる物泪裡より抜出り本堂  
 小より鼓を少鐘を敲せし満山より衆僧一斉小集りきと老師  
 一々小分付各衣服を改り行者を先小まき山門の外小出り跪下  
 中より僧官頭を叩き罪を謝し願うと唐老及耶又方丈小入り  
 按宿しりると三藏心悦をすし虫さのまが徒弟と俱小方丈  
 小より衆僧を供ふ管待多し三藏師弟吃罷り結り禪堂  
 小より坐禅し其後衆僧を退し三藏小門を逍遙する小月  
 けと清く皎潔なり悟空を呼ぶ俱小月を賞し三藏懐を真  
 一持を賦を其待小曰

皓魄當空寶鏡懸

山河搖影十分全



瓊樓玉宇清光滿  
處々牕軒吟白雪  
今宵靜玩來山寺

水銀銀盤爽氣旋  
家々院宇弄朱絃  
何日相同返故園

行者之をくりく曰師又月色光華ををく心小故里ををひひ玉ふ  
月家の意を知らず即ち天の法象の規繩たる月三十日ふりり  
陽魂の金散るを陰魂の水輪小盈故小純黒ふりり光たる即ち  
是を悔としく此同日と相交る。晦朔兩日の間小在る陽光を感じ  
孕み初三日ふりり一陽現む初八日小二陽生一魄中魄半なり故小上  
元と云十五日小三陽備足と是を以て團圓なり故小望と云十六日小  
一陰生一廿二日小二陰生と魂中魄半なり故小下弦と云二十日小三陰  
備足又晦日ある是先天採煉の意なり我亦能温養八の功を

かごと故園返る亦やと豈聞がらんや

前弦之後後弦前  
抹得歸來が裡煉

藥味平々氣象全  
志心功果即西天

三藏さく一付小解悟し満心觀喜しく稱しく悟空小謝し禪堂小  
回し悟空八戒汝僧を退る睡る三藏ハ經本をとつて燈下小是を

鬼王夜謁唐三藏

悟空神化引嬰兒

却就三藏ハ独禪堂小坐し燈の下小看經し居る小付三更の頃小  
ゆり忽ち一陣の怪風門外小吹さる燈を削り或る明や或暗く成  
何となく身毛取まき覺る小三藏ふり頭を揺る小燈のうげふ一  
個人渾身水小淋き眼中泪を垂る小停立し三藏發る曰汝妖怪奈

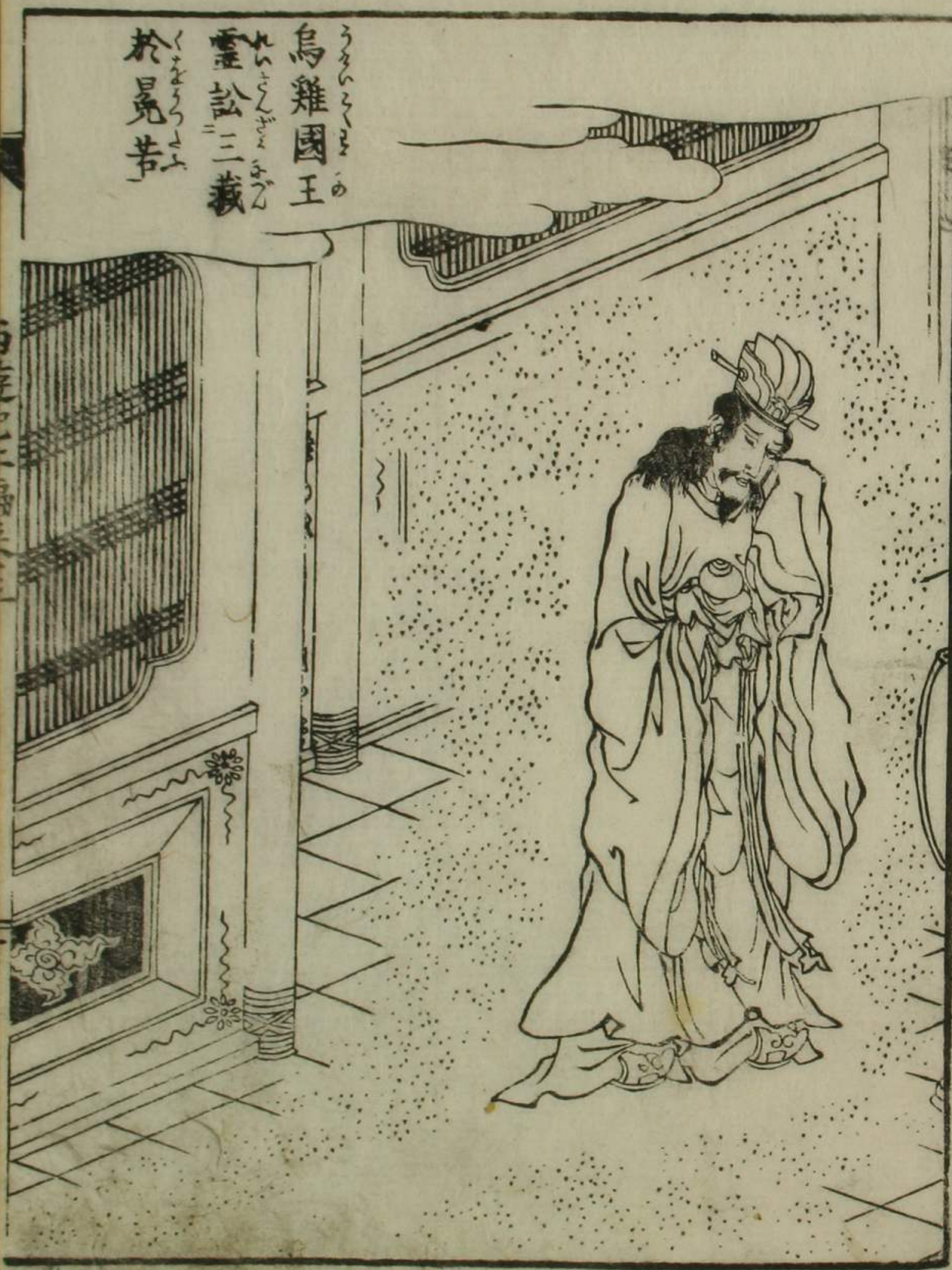


何ぞ我禪門ふきくれる早く去と喝とる。那人曰我は是妖怪小あふ。師又子細小我を見少。三藏言々暗をささく。天冠を頂死腰小碧玉帯を束ね身小赭黄袍を穿ち足小無憂履を踏手小白玉珪を執。三藏大の小強た身を躬。向く曰君は是一朝乃陛下何乃為茲小至。那人泪を流し云我家此里を離る。四十里二空乃城地あり号く烏雞國と。五十年前小天大死小旱。民皆飢死と。寡人是を悲。天地小祈と。魚更小其物た。然る小鐘南山小個の全真あり。よく風を呼雨を祈る。依く彼真人を結。雨を祈るむる小須臾。大雨降。民乃憂患を除く。寡人其徳を好。他と結。兄弟とかり宮中小居。二年。一日陽春の比左右を退け他と只二人花園小春色を遊び行。八角の琉璃井乃辺り小

つ。つと他寡人を把。井内推。石板をり。井口を掩。小土灰布。一株の芭蕉を植たり。叔真人も身を揺。我姿と変。終小國王を奪。三宮六院盡く他小属。二年。三藏言々大。驚丸。御身何ぞ陰司閻王乃所。行。斯と辨。鬼王曰他真人神通廣大。閻羅王と故。回。是。小依。告。小門。夜遊神一陣。乃神風をり。我を送。曾。他我。説。曰。三年。乃水。已。小満。此。小。我。師。又。を。拜。父。降。願。又の徒弟。各。天。大。聖。孫。悟。空。神。通。廣。大。深。く。大。恩。を。感。謝。す。我國中。小。妖。怪。を。正。を。明。か。り。深。く。大。恩。を。感。謝。す。三藏が曰。我。徒。弟。を。降。と。只。恐。く。一。個。の。難。の。鬼。王。曰。も。何。ろ。難。ぞ。也。三藏が曰。那。怪。も。小。妻。君。相。似。り。満



鳥糞國王  
靈訟三載  
於冕若





朝の文武皆他を眞の君王とす。然るに我徒事他をす。妖人を討んとせば、其の官人却て是人を欺た國を亂して賊とせん。是虎を画た雉を刺すと。類小あつても、鬼王曰師又の疑ひさるる事あれ。由我一個の太子あり。他此三々年妖怪小禁せられ、宮小入る母親と相見し能ふ。是ハ那妖怪母子相逢を長短の殆統の回小おのづから巴がら乃露生こゝ成恐る。故わん即ち太子明早城を出る。孫編とがみずきとら師又を拜せん。師又其因我物結のあり、心死を説きし。おつらみず信用とぶ。ゆゑ疑ふ。是をいせゆくと。白玉珪を三藏小あてたまむ。三藏結取て曰此上六徒弟と高議し。我をく人君と先より。鬼王悦び曰我又夜遊神小乞て。皇宮小入一夢を正宮皇太后あてて合意を教へ。師又必じ物をくむ。仇を報じらるる。

三藏を三拜しと別る。三藏立上りて門外まで送らふ。一度跌とす。心忽ちやたら覺て。是二傷の怪夢なり。茲小於て三藏徒弟ホと。きこれと呼まむ。悟空八戒汝和尚目を覺し。まきとら。何ぞのやと。向三藏が曰我今怪夢をまら。故小汝ホを呼。行者が曰師又路上小妖怪の夢を恐む。且雷音寺の遠をうまひ。あつて種々のゆと。んををひひは。更小一夢ををひす。三藏が曰我今夜の夢ハ。なふと。則ち鬼王が夢小あて。王珪を足せ。夢中のみひ死を説せせられ。行者感歎し。子照顧ある上。夢中のる將小真なるべし。君明日究魂乃。小妖怪をく。仇を報じらるる。三藏其謀を同行者。其因一棍の毫毛を抜く。斐と一個の紅金漆の画と。王珪を把る。



画の内小収りて曰師文明日此物を持て手中小捧げ錦襖乃袈裟を  
 穿て正殿の入り如き々々中へ更他多し信むべし三藏坐す此謀甚  
 しく良とて各種々計議も知ふ不意向東方發白とて行者前斗  
 雲ふ跳上りて四方を足る果て正面小一坐の城地あり秋心雲漠々と  
 一妖氣紛々として然る小忽ち砲声響きた東門より一隊の馬肉た出  
 是就ち採獵の軍兵なり軍中の一箇の小將軍あり頭小盛甲を  
 頂て手小宝剣を執腰小弓箭を帯て隠々として帝王の像  
 あり行者心中小中へ云ん這うあらず太子ありと吾一箇の威をたし他  
 を寺内へ誘へんとて雲頭を下りて身を揺り変へて白兔となり  
 太子の馬前をけり回る太子是を足る一箭を引て兵と放つ行者  
 此矢を把住跑まきりて宝林寺の山門の入り忽ち本相を現は

矢をとらて門の檻小神とてまきりて三藏小見て曰傾て太子きりて  
 吾を那箇の裡へ入るも斐どて二子絆の小和尚と成るれ三藏是  
 を紅金漆の画小入額をたてて相持りて同小那太子は白兔を追て  
 山門の入りて鬼をたてて件の矢小上小楠とて太子大いり  
 怪と更小其小人を知られ馬を寄て矢を抜り頭を撞り山門の  
 額をたれど勅賜宝林寺とあり遂小馬を下りて進り山門小入る衆  
 僧並ぞら死懼り出きり頭を叩て迎へ太子正殿の入り佛像を参  
 拜し終る目をよきとて正面小一箇の小和尚坐し居り太子怒り曰此  
 和尚我まきりてを憚らんと坐りて動きて死礼なり急死引下せし  
 分付る左右の臣命小懸りて三藏を把り下を太子叱り曰汝は是那方  
 の者ぞ三藏礼を施りて曰負僧東王大唐の者王命小依りて西天小





烏雞國太子  
田獵追白兎

西遊記二編卷三



西遊記二編卷三



つり佛を拜し宝貝を進むる者なり。太子曰。汝何の宝貝あり。三藏曰。我身上の袈裟は是第三等の宝なり。又第一等第二等の宝貝あり。太子曰。汝が袈裟半辺の臂をあらす。何ぞ宝貝と称する。太子曰。三藏曰。這袈裟全肘ならずし。是も袈裟あり。汝もこれと稱す。曰。

佛衣偏袒不須論内德真如脱世塵万線千針  
成正果九珠八寶合元神曾經仙女參修製遺  
賜禪僧靜垢身我見駕不迎猶自可你的又冤  
未報狂為人

太子曰。大なる怒り。曰。此狂僧何ぞ乱説か。汝は佛の袈裟を  
馮が自ら纏る。我は又の寛何国に有る。未だ報ざる。汝は猪く。これ結  
こし。八我宝剣。汝が頭小切す。三藏曰。貧道と云ふ。是れん。只這

紅匣の裡小一件の宝貝あり。呼ぶ。主命。貨とり。かく。過去未来の  
を。殿下。問。問。即ち知。太子曰。紅匣の蓋を開か。二十許  
の和尚跳出。両辺へ乱ま。太子嘲。此星々小入。何を  
う。行者。是を。曰。汝小を。就ち大と。腰を。一  
伸。七八と。太子を。衆人。小。太子曰。主命。貨  
老和尚。汝。過去。未。果。の。を。試。小。我。国。中。の。を。説。者。  
行者曰。汝は是鳥。雞。國王の太子。五年前。大。小。早。を。汝。家。皇。帝  
雨を祈。小。如。何。小。鐘。南。山。一。個。の。道。士。き。他。の。風。を。か  
雨を呼。汝。又。王。結。拜。一。兄。弟。と。夫。斯。の。を。太子曰。  
曰。緘。小。斯。乃。二。年。乃。那。道。士。風。化。行。処。を。行者  
曰。今。皇。帝。と。稱。者。誰。を。太子曰。是。我。又。王。た。行。者。を



抱く高く笑ふ。太子怒り曰。汝何ぞ小嬉笑とや。行者か曰。我汝小  
 一大事を告ぐ。衆人を退く。太子定む。則ち令を出し。人馬を門  
 外小退け。迹小三藏と行者と太子。三個なり。行者太。小向。明  
 風化。去。人。是。汝。又。王。今。位。小。坐。一。是。道。士。な。り。と。鏡。皮  
 下。も。疑。ひ。く。信用。せ。ず。行。者。堪。け。み。く。立。帝。貨。の。像。を。變。じ。く。  
 本。相。を。現。し。く。曰。我。假。小。立。帝。貨。と。り。汝。小。美。を。告。る。と。つ。ひ。も。汝  
 愚。昧。小。く。信用。せ。ず。今。ハ。定。む。照。顧。を。の。せ。ん。矣。ハ。我。ハ。邪。長。老。の  
 大。徒。弟。孫。行。者。と。り。人。者。なり。而。又。を。護。り。西。天。小。行。經。を。し。る。我。師  
 前後。此。里。小。宿。す。一。場。の。怪。夢。を。見。る。多。り。夢。小。你。又。王。の。冤。鬼  
 き。く。く。那。道。士。小。哩。れ。御。花。園。小。遊。び。琉。璃。井。の。撞。落。さ。り。て。水  
 死。と。其。は。邪。怪。土。乃。像。と。粧。り。位。小。在。も。滿。朝。の。官。人。凡。眼。小。見

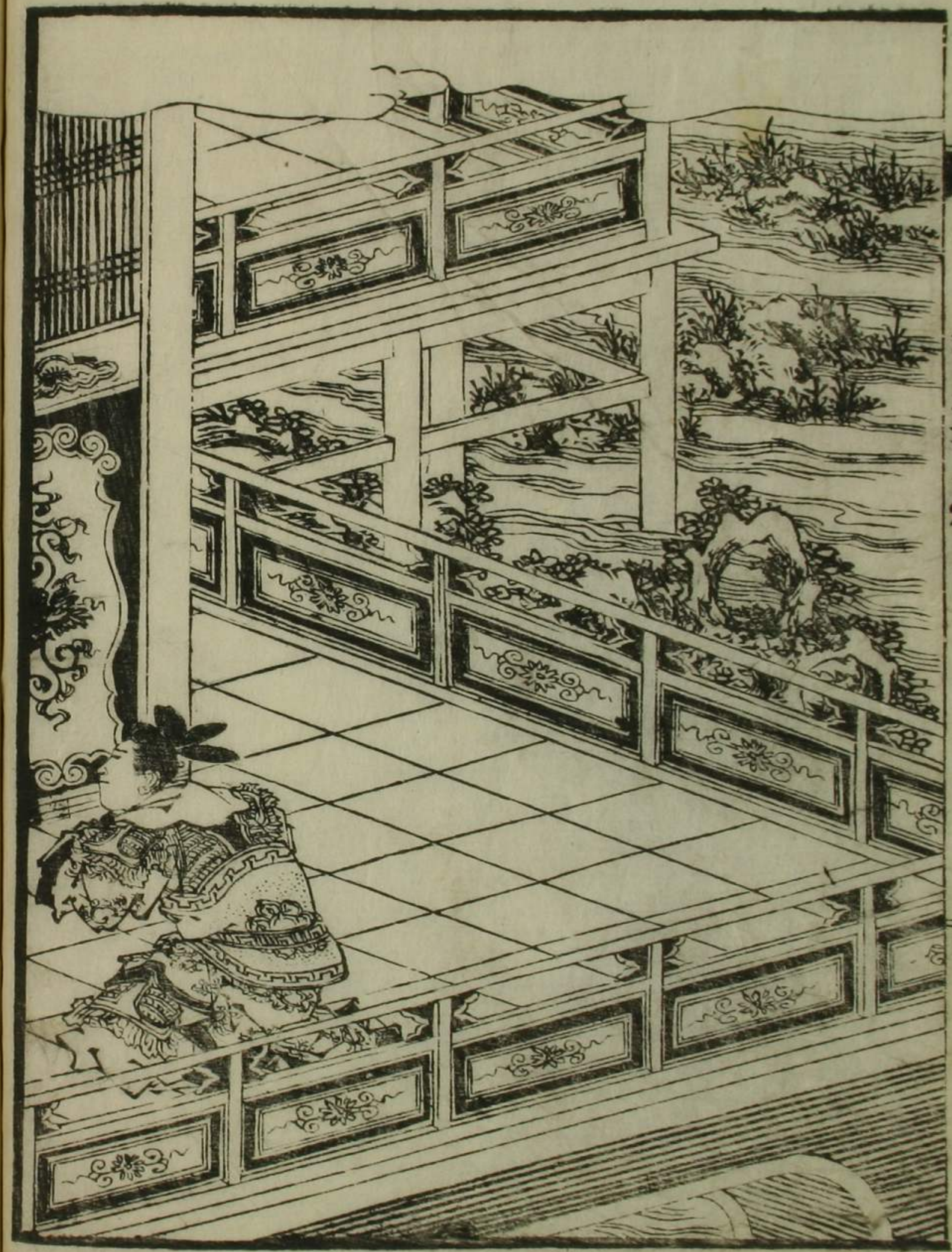
あ。く。能。ず。汝。幼。年。小。く。知。り。其。姓。怪。く。照。顧。ハ。其。は。汝。と。官  
 中。小。の。事。是。母。子。相。逢。鏡。結。ハ。自。然。已。か。惡。り。乃。顯。金。乙。子。と  
 恐。ろ。か。あ。か。り。且。御。花。園。の。琉。璃。井。ハ。石。板。を。り。く。口。及。掩。ひ。士。を。布  
 く。芭。蕉。一。株。を。植。御。花。園。を。閉。り。人。を。出。入。せ。る。さ。り。も。此。也。なり。と  
 汝。が。又。王。乃。冤。鬼。我。師。又。季。謝。其。他。を。報。せ。し。く。我。憑。記。ふ。と  
 く。携。り。白。玉。珪。を。く。か。か。り。汝。今。日。出。く。採。掘。ま。さ。る。く。汝。か。け  
 たり。依。り。我。白。兔。と。乘。り。汝。知。小。中。す。る。体。小。か。り。汝。を。引。く。這。手  
 小。き。く。甘。ハ。此。因。縁。を。記。す。と。其。乃。也。なり。と。那。紅。匣。乃。内。より。玉。珪。を  
 とり。出。り。く。カ。せ。れ。だ。太。く。取。り。懸。く。小。美。も。又。王。所。持。乃。玉。珪。小。て  
 道。士。風。化。せ。り。何。偷。去。す。と。奇。り。物。を。れ。ん。大。の。汝。舊。見。且。行。者。と。流  
 ところ。身。小。辨。中。身。を。半。ハ。信。り。半。ハ。疑。く。決。す。行。者。又。曰。汝。尚



狐疑を抱うを去り汝娘を小面會し他が夫妻恩愛の情三年前  
 と三年ほど如何と問其言をはてても真假を知ると鏡をれを太子  
 実りしと王珪を取収まり出入りし。行者引首て曰。汝もどく人を  
 茲小住置よりしを漏れは功をなす。汝個正陽門より後  
 宰門へ入る宮中より母親小見へて悄悄小低言り問ふは  
 那怪神通廣大をれを女中も覺む。汝母子の性命保ちかた  
 誠々わを太子に達し教小遵んこと山門を走り出軍士亦小令  
 一。汝亦此小在り也。我回ア成待をりし。獨馬小鞭を中より走法  
 眼女見問母知邪正  
 金木參佐見假真  
 却就太子城の中へ入り。行者が教のしく暗小後宰門より進り皇  
 宮へ錦香亭小入り娘を乃々不顔色昔小變りて裏へ幾個の

侍女を従へ亭上小坐せり。太子忙しく下馬し跪き母親を呼娘を頭を  
 抱く一月乃々大不流ひ我見此三年乃々を得む。今日何して来  
 まら。太子が白。孩兒一言母君小問さる在りきり願くは左右の人を  
 退けし。娘を即ち分付て侍女を退りし。太子低言て母親小問母君  
 夫妻の情三年前と三年後と如何いや。娘々是成ゆき満眼お泪を  
 流ゆ。汝り此鏡を問むん。我九泉の下小至りても明白を打つる。三  
 年前まは皇帝の身暖かき。三年の後冷たかり氷なり。我  
 不審し。此を問ふ。只老小逼りて身裏へ以前のしくを。いと  
 冬へぬし。いふ。終る。太子忙しく馬小棄んとす。娘を引任せ。汝何  
 由小逢り。此処を去んことやと問。太子隠し。能く。唐僧の夢の  
 りを。我。手疑半信かり。今母君の口を。今又王と







必是妖怪の事を知りし袖の裡より玉珪を取出し娘を呼ぶ  
 甘ん娘を召し又涙を流し曰我も昨夜一個の夢を召し汝が又王  
 水小淋々我面前へきり我死しん魂魂唐僧を拜す  
 を怪を降し前身を救ふを憑きしりかひて夢覚ると  
 まじい疑ひまじ晴るる何ぞ針らぬ汝又きりて此子を脱急小行  
 唐僧を請さるり妖人を降し又王娘育の思小報よといひれ  
 太子忙し馬小どり後宰門より出く鞭をよき宝林寺より又  
 独山門小く唐僧小湯し前乃先私をいびり母親の夢をいれ何  
 とも力を助け又乃仇を殺させり拜し憑む行者曰今日ハまじ  
 暮小近し明早危孫汝と俱小りて妖人を降しとて汝先より去て  
 待よ太子が白我今日城を出く探捕さる小まじ一頭の兎をり得

斯くハ城へ回りて行者白患さるる我汝小まじり物をあふ  
 雲端小跳りて捨鉢念咒とて山神土地神一呵小集来  
 行者命とて曰汝小まじり野物を撰ひ四十里の路上小おぼし太  
 子小と取り去りし命とて殺神領掌し別まじり行者ハ雲頭之下  
 太子小向ひ我とて小り行らひり早く城小之れ太子思茲謝し  
 軍士争ひて是を捉し勇進を太子ハ大悦ひ一更乃河分城中へ級  
 里へ叔孫行者ハ唐僧小向ひり曰老孫明早那城中小至りて人を降  
 させし囊の物を取しり安しとて小借りて一難あり二藏の白  
 如何なるぞと仁者曰那怪三年皇帝小徒兩班の文武と共小樂  
 老孫那を合する同百官小何乃照顧あると問人小一定なる證迹



かりて之罪名をささぐり因り我かり小八戒を賺し之那皇帝の  
 屍を尋ひ出し明日城よりり那妖怪を去り他り照顔呼ひせむ  
 則ち屍を他ふ有せむ。我殺し去る文武百官敢て異論ひく。三藏  
 支く汝を小計ひて命を行者就ち八戒が睡り居り床の辺より行  
 呼覚せむ。那欽子眼を覚せむ。行者腹を互耳成扱ひ強引せむ  
 へん。小眼を開ておひ疼る。哥を何を戯るや。行者曰。茲小個のよ  
 商議あり八戒目をささぐり。曰。そ何の商議そ。行者曰。日向那太  
 子の日件の妖怪小一件の宝貝あり。我明日城に進む。他と戦ふ。他  
 宝貝をとつ。我を降し。功勞画餅となり。先廻り。捨去る。不  
 不如我其隠し所を中へおひ。汝行。偷をき。八戒とら。曰。其  
 宝貝を取。我。捨。行者。點首。小。汝。得。

ん欽子大。小。愧。ひ。起。る。衣服を調。行者。も。小。祥。雲。を。起。し。跳  
 上り。城中へ。船。行。雲。頭。を。下。る。此。河。方。小。二。更。の。間。分。り。行者。八。戒。を。誘。て  
 御。花。園。小。り。門。を。去。開。く。ま。り。四。方。を。見。廻。る。果。然。一。株。の。芭。蕉。あり  
 行者。八。戒。小。曰。汝。手。成。動。各。宝。貝。此。芭。蕉。樹。の。下。小。あり。八。戒。心。は。鉦。を。上  
 る。芭。蕉。を。撞。倒。し。嘴。を。と。り。土。を。掘。穿。小。三。四。尺。許。日。く。石。板。あり  
 是。を。取。退。す。乃。ち。小。元。来。二。口。井。あり。八。戒。曰。哥。々。是。八。井。あり。素。わ。く  
 て。下。り。取。り。を。不。行。行者。曰。我。小。一。條。の。金。繩。あり。汝。先。衣服。を。脱。去  
 八。戒。衣服。を。脱。ぎ。赤。身。小。なる。其。同。行者。鉄。棒。を。取。出。し。七。八。丈。の。金  
 繩。と。かり。井。の。中。放。ち。下。せ。ん。八。戒。是。小。り。手。繰。を。て。と。り。水  
 水面。小。り。呼。び。曰。哥。々。何。の。宝。貝。也。只。是。井。水。の。と。なり。行者。曰  
 曰。宝。貝。を。水。底。小。沉。み。あり。汝。水。中。小。潜。り。令。搜。し。き。れ。八。戒。誠。と。心





行者



悟空八戒  
穿御花園  
需王屍

八戒

西遊記卷之三



ねえ来水性あきて深く水中ゆき入眼を閃た乃々小一坐の殿閣  
 あり額小水晶宮の三字を寫しつゝ八戒大の驚た曰罷了々々  
 是海底小き了れ王と云と井竜王の水晶宮ふしてと惆果と停居  
 々々を巡水夜及たはけく急小宮中へ竜王小告く曰上より一個の  
 長嘴大耳の和尚を下しきり井竜王曰是天蓬元師なり昨日  
 夜夜遊神鳥雞國王の魂靈を送り唐僧小見させ毎天大聖を  
 縛く奴を降さん手なり小大聖天蓬元師をく鳥雞國王の  
 屍を取らひるなり即ち門を出呼曰天蓬元師縛裡ふて  
 坐せよと八戒是をさく僕小とらふに迷小宮中へ上面小坐す竜  
 王曰元師何ら為茲小きるや八戒曰我きるる宝貝を求む竜  
 王曰元師我此所小宝貝なり那裡ふして宝貝あれども我取ら

元師自らきるる取ら八戒を引く廊廡り  
 一つ一個の死人を指さく曰他即ち宝貝なり八戒是を見れば那人  
 頭小天冠を頂た身小赭黄袍を穿ち無憂履をた兜王帯を繫  
 く八戒こゝひて曰は何ぞ宝貝なり竜王曰元師ちるる宝貝は鳥雞  
 國の屍をり井中より落下すより我他小定顔珠をよむ故小三  
 年を徑も曾て像を壊らる汝此屍を駈去る大聖小刀を起光回  
 生の法をりつゝ再世せしむ然るも如何なる宝貝を得ん八戒腹  
 を立我何ぞ死人を去らんやあお思そしと身を縛らまきり出る  
 竜王夜月小令し屍を宮門の外へ丟下す八戒是を及ねり急  
 小水際小浮き出く曰師兄金繩を下し曳上し行者曰汝宝貝を  
 取らるる八戒曰更小宝貝なり只井竜王教く我小一個の屍を去

西遊記二編卷三



去とりのいも。我是を肯む。行者曰。是宝貝なり何とぞ。汝きつらる。八戒曰。死を欲するを悪む。汝欲するなると我小換る。汝きつらる。行者曰。汝欲するを我。即ちより去る。安寤ん。汝長し。井中。小居よとく。詳し。回去ん。八戒大い小慌て。曰。哥を回去る。我底を欲する。再度水底小くを。入屍を搜し。背小欲水。面小崩れ出。呼ぶ。曰。哥を即ち欲する。金繩を下せ。行者是然。那金。金を。伸下せ。八戒金索の端。口咬付。行者小曳より。漸小井口を出。屍を放下。身を試ひ。衣服を穿。行者玉王の容貌。生る。く。死を。不審。何也。斯の。く。や。向。八戒。那井。竜王の。ひ。條を。二。遍。行者。悦び。造化。我。小。明。日。景。大。功。を。な。ん。汝。快。く。死。を。欲。する。捻。訣。念。兇。巽。地。小。向。一。口。の。気。を。吸。一。陣。の。風。を。吹。起。す。て。

八戒と云ふ。小城地を。ま。ま。進。小。寺。中。小。より。き。つ。ら。る。八。戒。禪。堂。の。前。小。屍。を。去。下。一。く。曰。師。父。起。き。ま。ら。ん。見。多。人。師。兄。我。を。教。た。国。王。の。屍。を。取。き。ま。ら。ん。三。藏。さ。く。沙。彌。と。り。小。門。を。開。け。出。る。刀。を。取。り。国。王。の。容。顔。女。の。変。せ。ず。活。が。く。た。れ。む。不。覺。洞。を。流。と。く。雨。乃。く。く。八。戒。歎。子。腹。を。抱。て。大。小。笑。う。く。曰。他。又。師。父。の。く。も。家。又。あ。の。あ。お。何。と。く。哭。む。や。三。藏。八。戒。を。比。し。出。家。八。善。惡。を。本。す。汝。何。と。く。這。等。心。硬。や。八。戒。曰。是。心。硬。す。ま。ず。井。竜。王。我。小。教。曰。大。聖。心。を。起。死。回。生。の。法。を。り。く。蘇。せ。せ。よ。師。父。さ。り。憐。れ。む。何。ぞ。外。小。回。生。を。求。む。と。三。藏。一。つ。り。行。者。小。向。ひ。汝。景。く。手。段。あり。早。く。醫。治。よ。行。者。曰。師。父。又。歎。子。が。乱。死。を。さ。く。信。ま。ら。ん。此。国。王。を。死。す。二。年。何。ぞ。蘇。生。と。ら。ぬ。三。藏。哀。れ。く。罷。ん。く。八。戒。又。

百三十三卷之三

一七



勸まをす曰い師し又また他た編ひんびんといふふ邪よこしま鬼おにをを念ねんじん國王こわうをを活いせせととすすをを求もとめめ  
 ぬぬ。三さん藏ざうのの鏡きやうをを行ぎやう者しや小せう向かうひひ汝に國こく王わうをを送おくせせととんんがが緊きん急くつをを  
 兄あにをを念ねんじんをを尚なほ医い活くわくととすすたたたた孫そん行ぎやう者しや大だい小せう恐おそまま師し又またか  
 らら守まもりり念ねんじんをを我われ思し惟ただとと念ねんじんのの心こころ中ちゆう八はち戒がいをを恨うらみみととすす其その手て段だんをを  
 ととすすかかいい町まちととすす

油清

油清

繪本西遊記二編卷之三



